

[いもの技術誌 その5]

戦中・戦後のサツマイモを支えた3奇人 小野田正利、長谷川 浩、井浦 徳

西尾 敏彦

イモ仲間の3奇人

「コガネセンガン」の育成者で、「イモ仲間」の最長老である坂井健吉さん（元農業環境技術研究所長）から、直接うかがった話である。坂井さんがサツマイモ研究の師と仰ぎ、「イモの3奇人」と尊称(?)を奉っている先輩が3人いる。

昭和30年代前半、両品種で栽培面積35万haを超え、5割近くのシェアを占めた「農林1号」「農林2号」の育成者小野田正利と長谷川浩。それに戦乱迫る沖縄にあって、戦後につながる系統の交配採種を担当した井浦徳。以下、昭和期前半のサツマイモ品種改良史を飾ったこれら3人の先輩について述べてみよう。執筆に際しては、坂井論文¹⁾を参考にした。

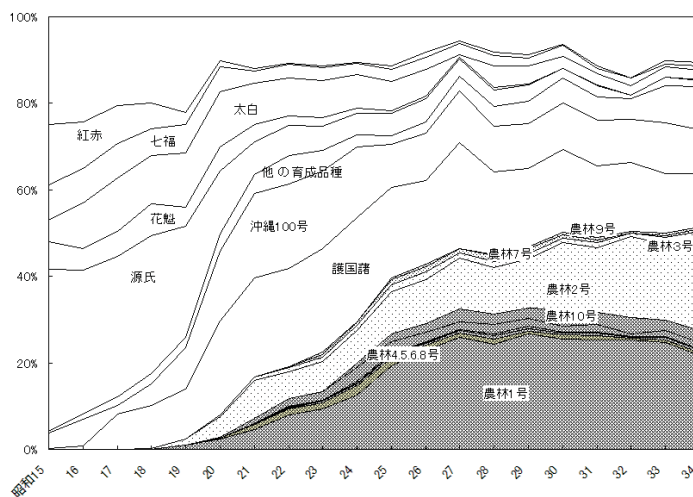
農林番号品種の誕生以前

まず3先人が登場する以前の、サツマイモ品種改良事情に触れておこう。図の昭和10～30年代のサツマイモ品種の変遷をご覧ください。当然のことだが、サツマイモ品種も最初は「源氏」「花魁」「七福」などの在来品種からはじまった。

サツマイモの品種改良

で、人工交配育種が成果をあげはじめたのは、昭和2年(1927)に農林省の「甘藷生産改良増殖事業」がスタートしてからである。この事業により、沖縄県農事試験場の小禄試験地（島尻郡小禄村安次嶺、現在の那覇空港周辺）が交配・採種を分担、その種子を内地の試験場に送り、各試験場で選抜する育種体制が整備された。

小禄試験地で交配された系統から生まれた最初の品種が、「沖縄100号（昭和9年育成）」と「護国諸＝高系4号（昭和13年育成）」である。いずれも同試験地の松永高元（「いもの技術誌その2」参照²⁾）らによって交配され、前者は地元沖縄県農試で、後者は三重県および高知県農試で選抜され、奨励



最下部の濃い網かけ部分は小野田の育成品種、その上部のやや薄い網かけ部分は長谷川の育成品種、最上部の最も薄い網かけ部分は井浦の育成品種

昭和10～30年代のサツマイモ品種の変遷

品種になった。

昭和12年（1937）になると、育種事業はさらに拡充され、岩手・千葉・鹿児島3県農試に酒精原料作物試験地が設置される。間近に迫った戦争に備え、航空機燃料用アルコール生産のため、急遽設置された試験地であった。サツマイモに「農林〇号」という品種名が付されるようになったのはこの時期からである（ただし「農林11号以降は別にニックネームがつく）。

「農林1号」と小野田正利

「農林1号」は昭和9年（1934）に、沖縄県農試小禄試験地で交配され、昭和17年（1942）に世に出た。両親は「元気」×「七福」。はじめは千葉県農試園芸部に委ねられたが、同農試に酒精作物原料指定試験地が新設されるとそちらに移管され、ここから小野田正利らの手で選抜された。多収・良食味で、当時としてはでん粉歩留まりも高く、とくに黒斑病に強いこともあって、戦中・戦後の食糧難時代に広く栽培された。昭和30年（1955）には最高普及面積9万8000ha、全国面積の26%に達している。

小野田の経歴をみて目を引くのは、この人とサツマイモとの付き合いの深さである。昭和12年（1937）に同じ千葉県農事試験場にあった小麦育種研究室から転じて以来、42年（1967）に退職するまで30年間、終始サツマイモ育種に没頭した。試験地はこの間に、組織再編で関東東山農業試験場（のちに農事試験場）に編入されるが、彼は生涯をサツマイモ一筋で通している。彼のその一徹さが生んだ品種には、「農林1号」のほかに、「農林4号」（最高普及面積：6000ha）「農林10号」（1万4000ha）「シロ

センガン」（8500ha）など13品種がある。

畦間を歩いただけで……

小野田の品種をみる目には定評があった。なにしろ「畦の間をさーっと歩いただけで、系統の良し悪しがわかる」³⁾ という伝説まであった人である。こんな話が伝わっている。

ある年に農林省で開催された新品種審査会の席でのこと。長崎農試から提案された初の暖地向けジャガイモ品種「タチバナ」が俎上にのぼり、審査は難航した。2日がかりの審査で決着をつけたのが、小野田の一言だった。「（この品種を）もっともよく知っている育種担当者が自信をもってあれほど説明しているのですから、新品種に認定してよろしいと思います」。

「タチバナ」がその後、秋ジャガとして広く普及したきっかけは、このときの小野田のこの一言にあった。長い経験から生まれた彼の発言はジャガイモにも通じたというわけである。

いっぽうで小野田は、戦争中には幹部候補生になり、工兵中尉として華中を転戦したそうで、試験場の機械修理や、電気工事は、玄人肌だったという。退職後もかつて試験地のあった千葉市内に定住していたが、平成12年（2000）94歳の長寿をまっとうして亡くなった。

「農林2号」と長谷川浩

〈東の「農林1号」、西の「農林2号」〉といわれ、東日本の「農林1号」に対し、西日本で広く栽培されたのが、長谷川らの「農林2号」である。この品種も昭和12年（1937）に小禄試験地で、「吉田」×「沖縄

100号」を両親に交配採種されている。

長谷川が新設の鹿児島県農試酒精原料作物試験地（鹿児島市郡元町紫原）に着任したのは昭和12年(1937)のこと。19年(1944)に農事試験場九州支場に転勤するまで、7年間ここで品種改良を担当した。ただし「農林2号」の育成にたずさわったのは14年(1939)からで、17年には育成を終えている。交配から世に出るまで、わずか5年という超短期育成品種であった。

「農林2号」は良質多収で、黒斑病には弱い、ネコブセンチュウにはきわめて強く、原料用・食用として、西日本各地での栽培に適した。全国30県で奨励品種に採用され、昭和38年(1963)には最高9万1000ha(29.1%)に達している。長谷川が育成した品種は、ほかにも「農林3・7号」がある。とくに19年(1944)育成の「農林3号」は冷涼地に向く高でん粉多収品種で、最盛期には9700haまで普及した。

長谷川の指定試験地在任は7年間だが、彼がサツマイモ研究に捧げた年月は小野田にひけをとらない。九州農試に移ってからも、研究対象はサツマイモで、九州における低収因が高地温にあることを明らかにした。晩植のため地上部の生育が不十分で、

露出した地面から地温が上がり、根の肥大が妨げられるというのである。これを回避するため、彼が提唱した麦間早植栽培は一時南九州に普及したが、麦作の減退とともに姿を消してしまった。

昭和31年(1956)には、母校京都大学教授に就任、定年後は近畿大学教授として学生の指導に当たった。わたしがお目にかかったのは、もう京都大学教授になられてからだろうか。たいへんきまじめで、学究的な方だった印象が残っている。

カンショ研究覚え書き集

サツマイモに対する長谷川の想い入れはさらにつづく。平成2年(1990)に、近畿大学農学部紀要に杉野守と発表した「カンショ研究覚え書き集(Ⅱ)」⁴⁾は、彼と同時代を過ごしたイモ仲間の想いを収録した貴重な記録である。

長年、サツマイモ研究に従事してきた全国の研究者OBにアンケートを出し、「実現できなかった研究課題、なお研究不足であったと思われる事項、まだ研究されないままになっている研究観察結果など」を集めている。国県の試験場や大学など、サツマイモ研究にたずさわった22名が覚え書きを寄せているが、それぞれの短文から彼らの熱気が伝わってくる。

長谷川は奇しくも小野田と同じ平成12年(2000)年に、92歳の長寿をまっとうして亡くなった。「カンショ研究覚え書き集」はサツマイモを愛してやまなかった彼の最後の遺作といってよいだろう。インターネット⁴⁾でみることもできるので、現役の研究者にはぜひ読んでいただきたい。



右から長谷川、坂井、小野田、井浦の各氏

小禄試験地を守った井浦徳

長谷川の後任として敗戦直前に鹿児島県農試に赴任したのが、井浦徳である。彼が育成した品種には、「農林7号」（最高普及面積4400ha）、「農林9号」（2600ha）、「ナカムラサキ」（5900ha）などがある。

井浦の最大の業績はなんといっても、沖縄戦直前の小禄試験地にあつて、交配採種事業を完遂し、戦後の品種改良につないだことだろう。昭和12年（1937）に前任の松永が本場に移って以降、8年にわたって小禄に滞在し、交配・採種を担当した。「農林5～10号」「シロセンガン」「フクワセ」など、戦後しばらくの間に出た品種はすべて、彼が沖縄で交配採種した系統に由来している。

小禄試験地が米軍の爆撃で灰じんに帰したのは昭和19年（1944）10月の第1回空襲で、同地の交配採種事業はこのときをもって終わりとする。井浦は20年2月に戦火の沖縄を離れ、1週間の船旅の末に鹿児島農試に着任するが、敵潜水艦に追われながらの、命がけの着任だったという。

戦後農林省から刊行された『沖縄に於ける甘藷の育種事業とその業績の概要』⁵⁾は実質的には井浦の著である。“幻の小禄試験地”の交配採種事業の全貌を伝える歴史的資料として、後世に伝えたい書である。

井浦には、わたしも熊本で親しくお付き合いした。当時、九州農試作物第2部長をされていたが、村夫子然とした飾り気の無い人で、パチンコと碁には目のないという噂だった。ただし、こと研究となると、辛辣な意見を容赦なく浴びせるきびしさも持ち合わせていた。昭和57年（1982）年、74歳で亡くなった。

つわものどもの夢の跡

戦中・戦後、国民の食生活を支えた「農林1号・2号」だが、最近はほとんどみかけなくなった。

小野田が「農林1号」などを育成した指定試験地があつた千葉市都町は今では市街地になっていて、試験地の前にあつた刑務所だけがおもかげを留めている。

長谷川や井浦が「農林2号」「農林7号」などを育成した鹿児島市紫原の試験地跡には、現在小学校が建つ。試験地があつたころは人里から遠く、飲用水は雨水にたよるほかなかったそうだが、今ではここもすっかり市街化した。小学校構内、かつて研究本館があつたあたりには「鹿児島試験地跡之碑」が建ち、往事の功をたたえている。

引用・参考文献

- 1) 坂井健吉 2001 小野田正利、長谷川浩両先輩を偲んで いも類振興情報 68:9～14.
- 2) 西尾敏彦2009 1億総腹ぺこ時代の命綱「沖縄100号」 いも類振興情報98:22～26.
- 3) 農林水産技術会議事務局 1978『指定試験事業50年史』
- 4) 杉野守・長谷川浩 1990 カンショ研究覚え書き集（Ⅱ）近畿大学農学部紀要 23:67～89. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110000978601>
- 5) 農林省農業改良局研究部編 1951『沖縄に於ける甘藷の育種事業とその業績の概要』